
宝物

聖成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝物

【Nコード】

N4671Y

【作者名】

聖成

【あらすじ】

学生を中心とした恋物語。

学生の主人公と相手との複雑な関係。

短編集

真奈美×浩介〜その感情は私たちの関係を壊してしまうの〜

桜が舞い

新品の制服を身にまとった新入生たちがきゅきゅ言いながら歩く。

中学一年生の春。

から、時は過ぎ

もう、冬です。

木々の葉は落ち、雪が降りそうな勢い。

「真美ー！行くよー」

五木 真奈美。

一年一組の女子生徒です。

最近の中学生はともおませ。

成長が早いというか……。

インターネットや雑誌、テレビなどで色々な情報を得ている。

今の中学生を子ども扱いしてナメていたら、危ないと思う。

そう感じる今日この頃です。

「五木さん。これ、オススメの雑誌一覧。五木さんこういうのに不慣れそうだから。」

朝井さんがメモ紙を一枚、私に渡す。

小中高生が見るファッション雑誌の名前がズラッと並んでいる。

「皆の話についていけなくなったら困るでしょ？」

朝井さんは優しい人。

皆から好かれていてあんまり暗い表情を見せない。

メモ紙を渡されたのはいいが、私は特に友達を作ろうと思わない。

別に無理して話をあわせる必要はない。

合わなくなったら外れればいいだけ。

と思う。

とぼとぼいつもの帰り道をいつもの様に歩いていた。

「まーなみ！」

背後から明るい声が聞こえた。

「こーちゃん！」

幼馴染の内 浩介。

家が隣で家族ぐるみで仲良し。

学校は、こーちゃんが試験受けていいところに入った。

私は近くの学校に通っている。

近くに学校があるのに、わざわざ試験を受けてまで行かなくてもいいと思う。

「最近、真奈美と会ってないよね？」

こーちゃんは私より少しだけ身長が高い。

「会った。」

「いつ？」

「二つ前の日曜日。」

「んー・・・？」

「こーちゃんが遠くの公園で知らない子と遊んでた。」

こーちゃんは黙り込む。

少し微笑む。

そして、くすくすと笑い出す。

「真奈美。それ、会ったっていわない。見たっていつの。」

こーちゃんは相変わらず笑う。

「それ、何？」

こーちゃんが私が手に持っていた紙を見ていう。

朝井さんから貰ったメモ紙だ。

「これ？これは、クラスの子から貰った紙。」

「手紙？」

「紙……。手紙ともいうかもしれない。」

私がそう答えると、こーちゃんは不安そうな顔をした。

そして、すぐに暗い顔……。嫌な顔をした。

「何て書いてるの？」

普段のこーちゃんの声じゃない。

こーちゃんの明るい、パアツとした声じゃない。

暗くて。

低くて。

気持ちがまっすぐに届きそうじゃない声。

「内容？内容は……」

「真奈美ちゃんと浩介じゃないの！」

私が言い終える前にこーちゃんのお母さんが来た。

買い物帰りの様で、スーパーの袋を三つ持っている。

「ちよつと浩介！これ持って。」

こーちゃんママはこーちゃんに一番重たい袋を持たせた。

「真奈美ちゃん、久しぶりねー。また、可愛くなって！」

こーちゃんママはそういつてこーちゃんを連れ、家に入っ
た。

こーちゃんは家を出る時間が早い。

バスで通っているからバスと時間が合うように早く出ている。

私は近いから、前よりも遅く出ている。

こーちゃんママは外に出るのが好きで、家の掃除をしてからすぐ、
出かけていく。

私のお母さんは逆に外に出ない。

インドア派。

「結局、こーちゃんのに答えられなかったな……。」

こーちゃんの質問に答えることができなくて、少し残念な感じが
した。

「ただいまー。」

「真美、それ、その子のこと好きなんだよ。」

昨日のこと。

こーちゃんのことを話した。

朝井さんや小道さん、前山さんは口をそろえていつ。

それは、相手のことを好きだと思っている証拠だ、と。

こーちゃんのが好き？

考えたこともなかった。

幼馴染。

家族。

兄弟のように育てられた私とこーちゃん。

好きななんていう感情が間に入ったら、こーちゃんとの関係が崩れてしまうのではないだろうか。

私の気持ちに一つの雲が出てきた。

不安。

怖い。

好き

という感情が私たちの仲を壊してしまうの？

そんなの、絶対だめ。

真奈美×浩介〜私たちを繋ぐ様に降る雪〜

「真奈美。それ、とつて。」

帰宅してからもずっと考えていた。

こーちゃんのが好き……？

そんな風にこーちゃんを見ていたの？

「きゃー！真奈美！」

お母さんが叫ぶ。

お父さんは啞然とする。

ふと、私は我に戻る。

お茶をコップ一杯注ぐつもりだったのが、どぼどぼこぼれまくるぐらいまで注いでいた。

私は慌ててお茶を冷蔵庫に片付けて、フキンで拭く。

「お腹いっぱい。ごちそうさま。おやすみなさい。」

私はそういつて部屋にこもった。

「宗次さん。とうとう、真奈美も好きな子ができたんですね。」

玲子（真奈美母）は宗次（真奈美父）にうつとりと話す。

「私が宗次さんに恋したときもあんな感じだったんですよ。」

玲子はにこっと柔らかい微笑みをした。

「あれはきっと、自分の知らない感情を知ってしまったんでしょうね。」

そういつて玲子は席を立つ。

玲子のいつもとは違う表情に宗次はドキドキしていた。

朝になっても頭から離れない、こーちゃんの顔。

昨日から気にしすぎだ。

真奈美は6時30分に鳴る目覚まし時計よりも早く目覚めた。

いつもより30分早く準備が済んだ。

することもなく私はいつもより15分早く家を出た。

「あ。」

玄関を出た、丁度同じ瞬間に隣の玄関からこーちゃんが出てきた。

「珍しいな、真奈美がこんな時間に出てるなんて。」

しまった……！

こーちゃんは出発時間が早かったんだ！

あーも！

考えなしに行動するからこーついうことに！

「何？俺と会うの、そんなに嫌？」

こーちゃんの悲しげな横顔。

そんな顔、しないで。

「ちがう……。」

私は無意識にこーちゃんの袖をぎゅっと掴んでいた。

「ちがうの……。」

こーちゃんは戸惑う表情を見せた。

そして、私はハツとして袖を離した。

「あ、ごめん。」

「いや、別に……。」

結局、その後、私とこーちゃんはあまり話さなかった。

何度か会話を続かせようと話題を出してみたが、長く続かない、返事が決まって3パターン。

いつもの道のりが長く感じられた。

「バス来てる。」

こーちゃんはバスに乗り込んだ。

「こーちゃん。気をつけてね。」

私は精一杯の笑顔でこーちゃんを送って見せた。

「告れ。」

小道さんは真顔で私を見つめ、そういった。

「告白……しろと？」

朝井さん小道さん前山さんは縦に首を振る。

私は顔を赤くしたらしい。

「何、照れてんの！顔が真っ赤じゃん。」

前山さんは私を見て笑う。

「いいから、今は五木さんの気持ちをぶつけてみるといいと思うよ。」

朝井さんは相変わらず、優しい口調で話してくれる。

私は小さく首を縦に振る。

三人はよっしゃ！と小さくガッツポーズをした。

私は小道さんからいわれた通り、バス停でこーちゃんを待った。

「真奈美……。」

こーちゃんは一番早いバスに乗ってきた。

「寒かったでしょ？はい。」

こーちゃんは暖かそうなマフラーを手渡してくれた。

帰るか、とこーちゃんは私を見て微笑んだ。

この間見た不安そうな顔はどこにも見当たらない。

「こーちゃん。あのね。」

こーちゃんと少し歩いたところでいってみた。

「あのね、こーちゃん。」

好き

「

こーちゃんは目を丸くした。

そして、ん？という顔をした。

「好き・・・？」

こーちゃんは聞きなおす。

うん、と私はコクツと縦に首を振る。

こーちゃんは顔を赤くした。

耳まで赤くした。

白い雪がこーちゃんの肌に触れてスウと消えた。

「俺も・・・・・・・・・・・・・・・・好きです。」

こーちゃんは私の瞳を真っ直ぐ見ていった。

こっちも体が熱くなるのを感じた。

こーちゃんと私の気持ちを繋ぐように雪が降る。

私の小さな花が開花した冬でした。

こーちゃんが私の大切な人となった冬でした。

想いが届いた冬でした。

歩×玲音、再会、そして、恋

「歩ちゃん!」

下校途中。

私はいきなり、背後から大声で名前を呼ばれた。

私の名前は牧野 歩。

「歩ちゃんだー!」

走ってくる彼は風間 玲音。

私の一つ下で、私の幼馴染だった高校一年生。

玲音が小学四年生、私が小学五年生のとき、玲音は引っ越した。

遠い遠い町。

生まれたときから兄弟同然に育てられた私と玲音。

離れるといわれたとき、どこかで繋がっている様な気がして、寂しくなかった。

それは、自分でも驚いている。

なきじゃくった玲音の顔。

私は力いっぱい。

でも、玲音が壊れて消えてしまわないようにぎゅっと抱きしめた。
それを最後に、玲音とは会っていない。

これからも、会うことはないはずなのに……。

目の前には幼き頃の面影を残す玲音いる。

「歩ちゃん。覚えてる？俺、玲音！」

会いたかったというように私に満面の笑みを見せる。

分かれた当初、肩辺りまでしかなかった身長が伸び、今や私を余裕で越すほどまで成長していた。

「俺ね、また、ここに戻ってきたんだ。」

優しく微笑みかける彼は周りをざわめかせるほどの美少年だった。

私は上手く成長している玲音を前に言葉をさがす。

何で、戻ってきたの？

いや、これは遠まわしに、戻ってこないで欲しかったのに、といっているようなものだ。

大きくなったね。

これは、玲音がきつといわれまくったであろう一言だ。

もっと、こつ、皆と違う一言。

玲音が喜ぶような一言。

私の鼓動の速さが、この嬉しさが伝えられる一言を……。

「綺麗になったね、歩ちゃん。」

私ははっと玲音を見た。

玲音が私の一歩先を行っているように感じる一言だった。

「玲音こそ……。昔と全然ちがう。」

玲音はおかしそうに笑う。

「そりゃあ、こんな小さい頃とは変わるさ。」

玲音は小学四年生のころの身長を手であらわした。

「ねえ、歩ちゃん。どこの高校、行ってるの？」

「私？えっと……。雨ノ森女子高。玲音は、どこ行ってるの？」

「俺は貴志川高校に、一週間前から通ってる。」

つい最近。

貴志川高校・・・街のすぐ近くにあつて、芸能コースがあるって有名な学校。

結構、頭もいい。

「ね、見てみてこれ。俺の従兄弟の聖也。中一の時に生まれたの。」
そういつて私に携帯を見せてくれた。

まだ、幼く可愛らしい玲音がそこにいた。

彼が抱えている男の子は楽しそうに笑っている。

その後も、これまで撮った写メをいくつも見せてくれた。

幼い玲音がどんどん大人っぽくなっていく過程が目に見えた気がした。

「じゃあね。私、こっちだから。」

久しぶりに会ったにも関わらず、私の人見知りはずっと早くにいらなくなっていた。

昔のように二人で話し、楽しい時間が過ごせたと思う。

「家、引っ越してないの？」

玲音は私が行こうとするのを慌てて呼び止め、聞く。

「うん。かわってない。いつでも、遊びにおいでよ。じゃ。」

私はそう言って改札口を通り抜ける。

家に帰ると、いつも通り、母が晩ご飯を作り、父が仕事をしている。

私は両親のいるリビングの横を通り、二階へ上る。

今日はいつもよりも早く、歩数が多い。

玲音と会って。

成長した、あの、かっこいい玲音を見て、ときどきしないはずがない。

私だって一応、女の子だ。

まだ、恋もしたことないし、初チューだったことない。

漫画やドラマみたいな恋に憧れるような高校生。

周りからは、成長しろと口々にいわれる。

成長したいとは思っている。

でも、憧れはある。

カッコいい人を見て、ドキドキする。

「これが

「恋なの？」

玲音と再会してから、早一ヶ月。

段々、暖かくなってきたこの日。

毎日のように、校門に迎えに来てくれていた玲音が来なくなった日。

玲音が来なくなる前の日。

私はいつものように、教室を出ようとしていた。

「あ！待って、牧野さん！」

ふいに呼び止められた。

「ねえ、いつも校門のところにいる子、牧野さんの彼氏？」

クラスでも目立つ方でクラスメイトから人気の仲良し四人組。

「彼氏っていうか・・・幼馴染。」

四人組は目を輝かせていう。

「牧野さんって、あの風間くんの幼馴染なの！？」

「あの風間くん・・・？」

私の言葉にはとこつちを見る。

「そう！あの有名な舞台から華々しくデビューした人気の俳優だよ
！」

玲音が俳優・・・？

「でも、まだ、テレビにはばんばん出るっていうレベルじゃないから、
知らない人が多いかな・・・。」

玲音が？

玲音、そんなこと、一言も教えてくれなかった。

何で？

私と玲音の関係って、そんなものだったの・・・？

私は悔しさと怒りが腹の底からこみ上げてくるのを感じた。

「そうだったんだ・・・。ありがとう、教えてくれて。」

私はそういって、足早に去って行った。

歩×玲音〜一心同体〜

校庭では残って遊んでいる生徒たちの声が響く。

楽しそうにはしゃぐ声。

校門ではいつものように玲音が待っていた。

玲音は私を見つけるや光の速さで近寄ってきた。

「歩ちゃん！どうしたの？そんな暗い顔して。」

玲音は私を見るとそういった。

私は一時、何も言わず玲音と歩いた。

「玲音。何でいってくれなかったの。」

大分、学校から離れたとき、私はポツリとつぶやいた。

「え………？」

玲音は足を止める。

「ねえ、玲音。何で自分が俳優やってるっていってくれなかったの？」

「いや……それは……。」

私は下を向く。

「だって、歩ちゃん、俳優嫌いだって昔いつてたから。」

そう。

私は俳優が嫌い。

俳優という職業が兄を追い詰めた。

あれは、私が5才のとき。

「歩。今日から歩は一人っ子。分かった？」

当時、兄は25歳。

人気急上昇中の注目若手俳優だった。

私は兄のいつている言葉が分からなかった。

私は一人っ子じゃない。

にいにがいるもん。

なんで、歩は一人っ子なの？

私は兄の歩く方向を見ていた。

兄はマンションの屋上へ向かって歩く。

私も後をつけていく。

この日、両親は仕事に行っていて留守だった。

マネージャーさんも少しの間、家を出ていた。

「にいにっ？」

私の言葉にピクリとも反応しない。

きつと、このときの兄は放心状態だったのかもしれない。

「歩。歩。歩。じゃあな。」

私の名前を最後まで呼び続け、そのまま

落ちていった

私はそれを見た。

兄は決してあんな最後を見せたかったわけではないと思う。

私は泣き叫んだ。

でも、声が出ない。

涙も出ない。

夢だと思ったかった。

マンションの下では人々の叫ぶ声が聞こえる。

私はひたすら立ち尽くしていた。

頬に一筋の涙が流れる。

「……」

私は5才の自分を思い出し、胸が苦しくなった。

「俳優は兄を奪ったの。」

震える声でいう。

「俳優は私の大切な人を奪ったの……！」

私は肩を震わせながら、涙を流しながらいった。

「俳優が玲音を奪うかもしれないの！」

怖いの。

玲音がいなくなる。

考えたくないけど・・・にいにみたいにいなくなっちゃ嫌だもん
「!」

私は玲音にしがみ付いて離れたくない。

そう思った。

でも、今の私は誰かに触れるとその人から離れられなくなりそう
だった。

私は玲音の顔を一度見ると、家に向かって走った。

走って。

走って。

走って。

息は切れ、咳込む。

涙は濁き、私の心は音を立てて崩れていった。

にいに。

私の大切な人。

玲音。

私の大切な人。

いつの間に、私は玲音を特別な存在と思っていたのだろうか。

次の日から玲音は私の前に姿を見せなくなった。

そして、三週間が経った。

私には長い長い三週間。

玲音が私にとってどんな存在だったのかが分かった三週間。

ふと、テレビをつける。

きらきらする画面。

沢山の色が楽しそうに踊る。

「この曲は、俺が大切に想う人に届けたい一曲です。」

玲音。

私は自室にあるテレビに瞬きを忘れ、見入っていた。

あなたと会えた

偶然のような奇跡

僕には最後のチャンスだと思った

僕は君に伝えなくちゃいけない

好きだよ

どこにも行かない

僕は君の傍にずっといるから

泣かないで

泣かないで

大切な君

私は無意識に涙がぼろぼろこぼれていたのを知った。

伝えなきゃ。

あなたに私の気持ちを。

大切なあなたに。

伝えなきゃ。

私は生放送のあっているテレビ局へ走った。

「っはあ……はあ……れ……れ……おん……」

出待ちの子が玲音のうちわやグッズを持って待っていた。

「きゃーー!!」

玲音が出てきたらしい。

最後の力を振り絞って、女の子たちの群れを掻き分け、前へ進む。

「玲音！」

その声にハツとしたようにこっちを振り返る。

その瞬間。

ぐいっと腕を後ろにひっぱられた。

そして、そのまま、車に乗せられた。

「歩ちゃん！」

乗せられた直後だった。

この車は玲音のマネージャーさんの車らしい。

「玲音……！」

私に抱きつく玲音。

「会いたかった。あの曲で歩ちゃんに見つけて欲しかった。俺の気持ちは真っ直ぐに届くように。」

玲音の手に力が入る。

「好き。」

私は真っ直ぐに玲音の目を見ていう。

「俺も。」

玲音は軽くおでこにキスをした。

「どこで覚えたの？その技。先越された感じがしてムカつく。」

私はプイツとそっぽを向いた。

「もう、離れないから。話さないから。」

そんなこと、お構いなしに玲音は私を抱きしめる。

心が通じ合えば、考えが読み取れる。

考えが読み取れば、心が通じれる。

あなたと私は一心同体。

離れないでね My Honey。

奈々子×祥太郎

雪が降り積もり、外は真っ白な世界に包まれた。

私の手のひらに一つ。

空からの贈り物が降ってきた。

「奈々子ー。後ちよつとでクリスマスだね！」

中学一年生の私、小野 奈々子。

大人が思っているよりも最近の中学一年生はませている。

組の と が付き合っている。

組の は他校の子とクリスマス、一緒に過ごすらしい。

そんなうわさがどこからも聞こえてくるような冬休み前。

今年からサンタクロースは来ない。

子供は小学生まで。

中学生は子供以上大人未満。

一人暮らしを始めた姉がそういつていた。

「奈々子。いつ、雪、降るかなー。」

窓の外を眺めながら友達がいう。

私も一緒に外を見る。

雪が降りそうな気配はない。

ただ、寒いだけ。

「クリスマスに降ればいいね。幸せなカップルに神様からの贈り物として……。」

私はぽつりとつぶやく。

最近、姉に彼氏ができた。

姉とその彼氏に祝福の雪。

きつと言んでくれるだろう。

寒さに負けぬよう、手袋とマフラーを隙間のないように常備する。

でも、指先やつま先は冷えて、感覚が半分なくなっている気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4671y/>

宝物

2011年12月9日23時48分発行